

コスメの新たな技術を
ユニークな視点で読み解く

BEAUTY SCIENCE EYE

パラベン採用の変遷 企業間に相違

—『Cosmetic-Info.jp』データ分析(2)—

一般社団法人化粧品成分検定協会 代表理事 久光 一誠

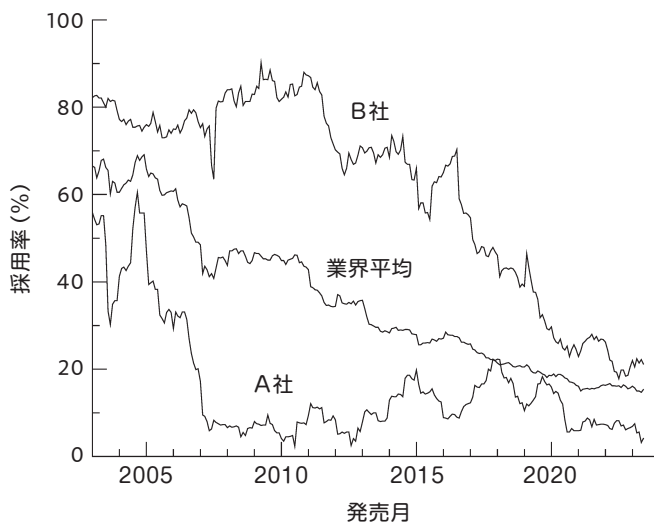
化粧品技術者向け情報提供サイト「Cosmetic-Info.jp」(<https://www.cosmetic-info.jp/>)では2001年以降に国内で発売された多くの化粧品の全成分リストを収集し、公開している。四半世紀にわたるこの情報を整理すると化粧品設計の変遷を垣間見ることができる。今回は企業による防腐設計に対する考え方の違いを野次馬視点で見てみる。

全成分リストから何かを推測するには母数が多いことが重要である。そこで発売商品数が非常に多い業界を代表する大手4社のうち特徴的な傾向が見られた2社(それぞれのグループ企業を含む)

を取り上げる。なお今回は母数の少なさによる変動を小さくするため12カ月単純移動平均を用いている。これによって変動を小さくして傾向が見やすくなるが、過去12カ月分が均等に重み付けされるので実態と比べて変化が遅れ気味に現れることや変動幅が小さめに現れることに留意していただきたい。

パラベン配合に対する考え方の違い

当月に発売された商品のうち全成分リストに「パラベン」の文字がある商品の割合を採用率(%)として、業界全体、A社、B社のそれぞれについて



■ 図1 企業グループ別パラベン採用率の変化 (12カ月移動平均)

まとめたのが図1である。

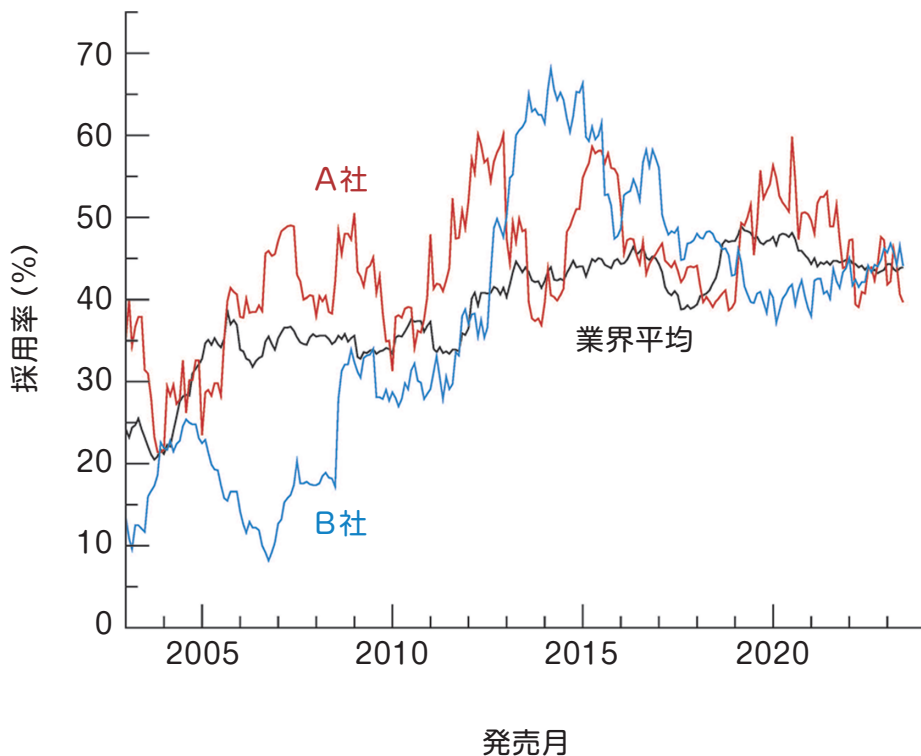
これによるとA社のパラベン採用率は、当初業界平均より少し低い程度だったものが2005年ごろから急激に低下し、2007年ごろには業界平均を大幅に下回る10%未満になっていたことがわかる。大手4社の一角を占めるA社は非常に多くのブランドを抱えながら2000年代初頭のほんの数年のうちにほぼすべての商品をパラベンフリーにしていたのである。その後10%台に採用率が高まった時期も散見されるものの、おおむねこの20年間A社が発売した化粧品の全成分表にはほとんどパラベンの文字を見ることがない、という状況であることがわかる。

一方でB社は、業界全体のパラベン採用率が徐々

に低下し続けるなかにあっても長らく8割ほどの商品でパラベンの採用を続けていたことがわかる。2010年ごろのA社とB社のパラベン採用率の差には驚く読者も多いのではないだろうか。B社がパラベンの採用を減らし始めたのは2012年ごろからで、その時点で業界平均のパラベン採用率はすでに50%を切っていた。そこから業界平均との差を縮めるように急速にパラベンの採用率を低下させているものの2023年時点でもまだ業界平均よりもわずかに採用率が高い。

フェノキシエタノールへの代替

次にパラベン代替の有力候補であるフェノキシエタノールの採用について比較したのが図2で



■ 図2 企業グループ別フェノキシエタノール採用率の変化

ある。

業界平均としてフェノキシエタノールの採用は徐々に増えているもののパラベンの採用率の低下はそれ以上であり、フェノキシエタノールへの代替だけでなく多価アルコールの採用も進んでいることは前号のコラムのとおりであり、この傾向はA社も同じであった。

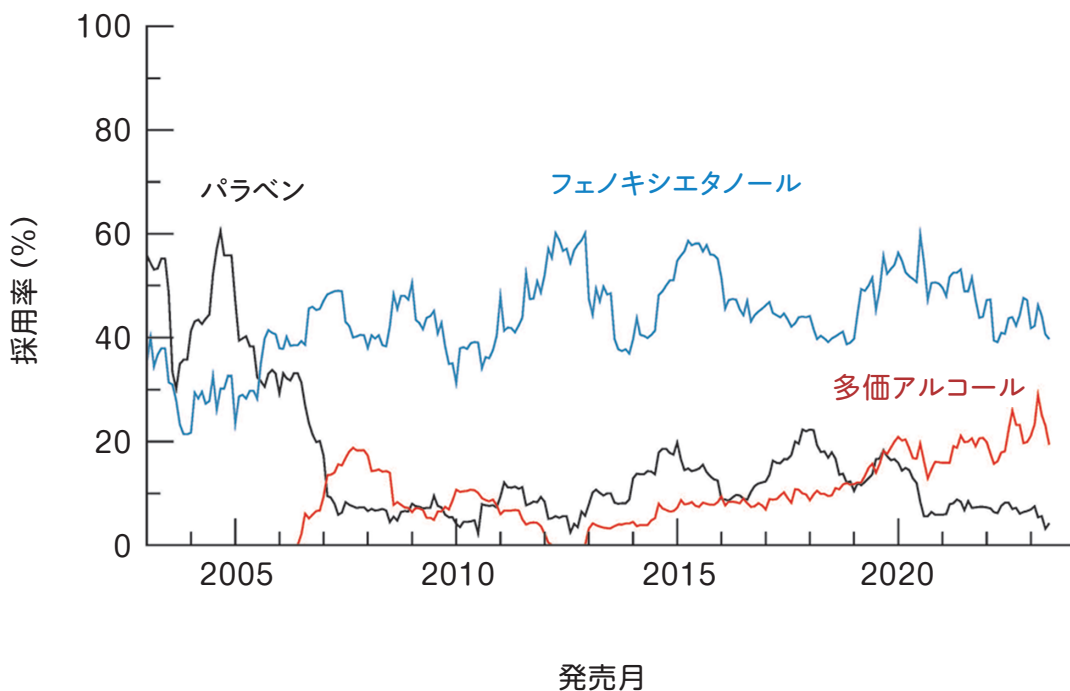
一方、B社は防腐設計の基本をパラベンに据えていたこともありフェノキシエタノールの採用率は業界平均より低かった。それが2012年ごろになるとパラベン採用率の低下に先んずるように急激にフェノキシエタノールの採用率が上昇し、数年後に今度は業界平均よりもかなり採用率が高くなり、その後は再び採用率が低下してここ数年は業界平均と同等の採用率になるというジェットコ

ースターのような変化が見られる。

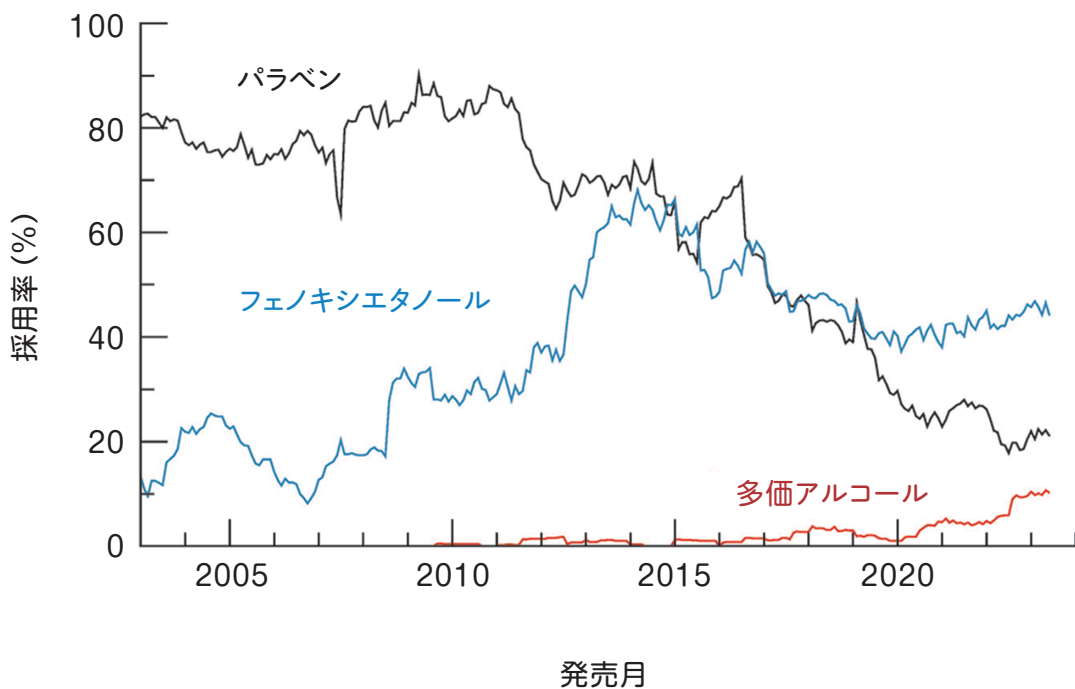
企業による防腐設計の違い

静菌作用に特化した多価アルコール（ペンチレングリコール、1,2-ヘキサジオール、エチルヘキシルグリセリン、カプリリルグリコール）の採用状況も含めて両社の防腐設計の変化をまとめたのが図3である。

20年ほど前はA社がパラベンとフェノキシエタノールを同程度に使用していたのに対し、B社はフェノキシエタノールを配合した商品が非常に少なくパラベン一本足打法ともいえる防腐設計だったことがわかる。近年になると両社ともフェノキシエタノールを主軸とする防腐設計になっていることは共通しているが、A社は加えて多価アル



■図3-1 A社の防腐設計の変化



■図3-2 B社の防腐設計の変化

コールの採用も進めることでパラベンの採用率をさらに押し下げており、採用率の高さはフェノキシエタノール>多価アルコール>パラベンの順になっている。これに対してB社は多価アルコールの採用に慎重で、最近の調査結果でも採用率の高さはフェノキシエタノール>パラベン>多価アルコールの順になっている。

消費者への情報開示を目的としている全成分表示ではあるが、蓄積して整理するとさまざまな視点から業界全体や他社の設計トレンドを垣間見ることができる貴重な参考書となる。

間に発売された「化粧品の商品数」に対する「特定の成分が全成分リストに含まれている化粧品の商品数」の割合を百分率で示すものである。%単位で紛らわしいが配合量ではないことに留意していただきたい。

注) ある成分がどれほど汎用されているかを測る指標としてこのコラムでは「採用率」を定義する。これは、所定期